

クズヤの由来と屋根葺き棟梁葛右衛門について

瀬川 修

岩手県立博物館, 020-0102 盛岡市上田字松屋敷 34. Iwate Prefectural Museum, Morioka 020-0102, Japan.

はじめに

クズヤとは茅葺き民家のことである。古文書では、漢字で葛屋(家)と書かれることが多い。この言葉は、『日本民家語彙解説辞典』によると、青森・岩手・宮城・山形・栃木・群馬・新潟・富山・大阪・京都・島根・高知・全国に見られる、茅で葺かれた民家またはその屋根を表す言葉である。歴史用語であるだけでなく、現在でも同じ意味で使われている。

このクズヤという言葉の由来については、岩手県内には葛右衛門の屋根の意味であるという言い伝えがある。葛右衛門とは盛岡藩の屋根葺き棟梁であるが、全国的に広範囲で見られる言葉でありながら、盛岡藩の屋根葺き棟梁に由来すると考えるのはおかしなことである。

したがって、全国的に用いられるクズヤと岩手県内で話されるクズヤとは、もともと由来が違うものと推測できる。

本論は、岩手の葛右衛門説の由来を明らかにし、クズヤという言葉の意味・由来について考察するものである。

1 クズヤとは

岩手県では、クズヤとは茅葺き民家を表す歴史的な言葉であると同時に、現在も使用されている言葉である。例えば、「うちはクズヤだから」というように、謙遜的あるいはちょっと恥ずかしいのだがという意味合いで使われることが多い。

歴史的には、古文書において葛屋(家)と記され、単にくず(くづ)とだけ書かれることもある。しかし、古文書では茅(または萱)も使われることがあり、両者の区別は明らかではない。

民家の屋根はススキで葺かれることが多く、これを茅葺きと呼んでいる。茅とは広義にはススキを代表とする植物性屋根葺き材の総称で、ヨシやコムギなどを

含む。岩手県の場合、ほとんどがススキで葺かれている。全国的にもススキが最も多いが、ヨシやコムギなどの地域特有の植物で葺かれているところもある。

クズは漢字では葛と書かれる。クズはマメ科クズ属の多年草である。山野に自生するつる性の植物で、根はデンプンを含み、食用・薬用として古くから生活に欠かせない植物である。

しかし、このクズという植物を屋根葺き材として使うことはない。クズヤのクズとは植物としてのクズをいうのではない。葛の字を使うのは明らかに当て字である。クズとは植物名をいうのではなく、別のことを表していると考えられる。

2 岩手の葛右衛門説について

岩手県ではクズとは植物ではなく、葛右衛門という人物の名前の一部に由来するという事になっている。

岩手県内の一般向けの歴史書には、次のように記されている。

「南部藩では山城国から鳥山葛右衛門という屋根葺きの名人を招いて、城下町を中心に屋根葺きを指導させた。むかしからの屋根葺きには稲わらや麦カラをつかったが、葛右衛門は萱をつかって葺いた。このカヤ葺き屋根が長持ちしてよかったので、世間では「葛屋根」とよんで、この方法が普及した。」(『都南村の歴史』)

「南部の曲家は、寛文五年(一六六五)以降に、山城国北山出身である北山葛右衛門の指導によって、岩手郡、志和郡に発達したものと伝えられている。(略)葛右衛門の一字をとって「葛屋根」と称しているが、葛屋根は夏は涼しく、冬は暖かい。」(『矢巾町の歴史』)

「南部藩では、山城国から鳥山葛右衛門という、屋根葺きの名人を招いて、城下町を中心に屋根葺きを指導

させた。むかしからの屋根葺きには、稲ワラや麦カラをつかったが、葛右衛門はカヤ（萱）をつかって葺いた。このカヤ葺き屋根が長持ちしてよかったので、世間では“葛屋根”と呼んでこの方法が普及した。」（『紫波町の歴史』）

江戸時代に、鳥山あるいは北山ともいう葛右衛門という人物が、屋根葺き材に茅を使用して、その持ちがよく評判になった。葛右衛門の屋根と呼ばれ、それがクズ屋根となったということである。

ここに引用した3冊の歴史書は、ある共通した文献によっていると思われる。いずれもこの部分の出典を明らかにしていないが、巻末の文献をみれば横川良助の『内史略』であることは明らかである。

横川良助（1774～1857）は、江戸時代盛岡藩の歴史家である。数多くの著作を残したが、その代表的な著作ともいえるのが『内史略』である。『内史略』は盛岡藩に関する史書であり、前編24冊、後編20冊からなる。前編は史料を編集した政治史が主で、後編は聞き書きによるさまざまな社会事情を述べている。

『内史略』で葛右衛門は2回登場する。ひとつは葛右衛門の経歴のみを伝える（史料A）。もうひとつは葛右衛門なる人物の経歴と葛葺きの由来を記す（史料B）。以下、その部分を記す。

史料A

「屋根葺棟梁葛右衛門 重信公滴石にて五十石被下召抱 生国城州北山の産也 故に北山葛右衛門と云 故有て身帯被召放 子に三駄二人扶持被下 今屋根葺棟梁鳥山勝兵衛先祖也 云々 隣家懇意之者を酒興にて誤て突殺す 是非なく解死人と成 宗旨の寺にて切腹元禄年中の事也」（『内史略』）

史料B

「生国山州北山也 重直公御代被召抱 零石の内やひつ村にて知行被下置 後三駄二人扶持被下鳥山葛右衛門と云 其頃柿葺を葛葺と云 後生誤て萱葺を葛葺と云」（『内史略』）

この2つの記述から次のことがわかる。

- ① 屋根葺き棟梁鳥山葛右衛門は山城国北山の出身である。
- ② 南部重直あるいは重信に零石で召し抱えられた。

- ③ 庶民は柿葺きを葛葺きと呼んだ。
- ④ 後世、茅葺きを葛葺きと誤用するようになった。

重要なのは史料Bの方である。これによると、葛葺きとは本来柿^{こけら}葺きのことであって、誤用されて、茅葺きを葛葺きというようになったというのである。すでに横川の時代、すなわち江戸時代末期には茅葺きを葛葺きと誤っていわれるようになっていたという。この部分を前述の歴史書は取り上げていない。茅葺きをクズヤということを唱える人も、この誤用を主張する人はみられない。

なお、『岩手県史11 民俗篇』はこの史料を引用し、誤用されていると記している。しかし、これが記されるのは柿葺きの解説の項であって、茅（萱）葺きの項にはクズヤあるいはクズ葺きについては何も記されていない。茅（萱）葺きの項だけを読んだ人は気づかないであろう。

史料Aでは葛右衛門の経歴について記されている。史料Bと違うのは盛岡藩主が重直から重信に変わっていることである。どちらの藩主に見出されたかはわからない。史料Aは『内史略』前編であるので、何らかの史料をもとに書いていると思われるが、それが何であるかはわからない。盛岡藩の家老が著わした執政記録である『雑書』には葛右衛門の登用のことは記されていない^{（註1）}。また、史料Aによると、葛右衛門は不幸な最期を遂げているが、この事件も『雑書』に記されていない。

このように、藩政を記録した『雑書』に登場しないという点でやや疑問も残るが、『内史略』を読むと横川良助はかなりの資料に触れていた形跡がある。当時何かの文献があつて、横川はそれを見ることができたのであろう。ここではこの歴史家を信用しておきたいと思う。また、後裔だという鳥山家は確かに盛岡藩藩士録に名前がみえる。

以上見てきたように、誤用ながらもクズヤとは葛右衛門の屋根に由来することが明らかになった。なお、この誤用のことであるが、横川の時代からすでに150年以上の年月が過ぎている。この誤用は定着したものとして、扱うのがよいと思われる。

3 葛右衛門について

前項で、屋根葺棟梁葛右衛門の登用や解任とその起因となった事件について、藩の執政記録『雑書』に記

録がないことを記したが、葛右衛門の死については異なる記述がある。それは次のようである。

史料C

一 類族屋根葺棟梁葛右衛門、年四拾八従旧冬煩、三浦道意療治仕候得共、不相叶昨日病死仕候由、大工奉行申出、為検使御徒目付梅内市平遣見届取仕廻之

(『雑書第十卷』正徳4年6月16日)

一 屋根葺棟梁類族葛右衛門、去十四日年四十八、従旧冬相煩病死付て、今日御飛脚ニ江戸へ自宗門奉行共申遣之

(『雑書第十卷』正徳4年11月6日)

これによると、葛右衛門が死亡したのは正徳4年(1714)6月14日で、死因は病死である。行年48歳であったので、生まれは寛文7年(1667)ということになる。横川良助の記述とかなり異なり、同一人物とは思えない。横川の記述によると、登用されたのは藩主重直または重信の頃である。この二人が藩主であったのは、寛永9年(1632)から元禄5年(1692)であるから、年代的に合致しない。この葛右衛門は名跡を継いだ子ではないだろうか。葛右衛門が名跡になっていたことを示す記録がある。

史料D

一 三駄三人扶持 屋根葺棟梁半次郎

屋根葺棟梁葛右衛門病死ニ付、大工奉行共願之通、葛右衛門跡式無相違、半次郎被下置候之間、家業無油断相勤候様被仰出、大工奉行田鍍太郎右衛門へ申渡之

(『雑書第十卷』正徳4年11月6日)

これによると屋根葺棟梁半次郎が葛右衛門の名跡を継いだことがわかる。半次郎とは子であろうか。横川の記述どおりだとすると、葛右衛門は寛永から元禄年間の人であるから、この雑書の死亡記録は2代目葛右衛門と推測される。

また、『もりおか物語(八)』によると、葛右衛門は盛岡城下の葺手町(現在の中ノ橋通)に住んだという^(註2)。町名は屋根葺き職人が住んだことにちなむ。当初は屋根葺町といい、慶安4年(1651)に葺手町(丁)に改められたという。

このことは年代的には整合性があるが、葛右衛門が葺手町に住んだかは文献的に確かめられなかった。

4 一般的なクズヤについて

岩手県で使用されるクズヤは以上のような経緯で定着したものであるが、クズヤは全国的に見られる言葉でもある。一般的に使われるクズヤはどのような意味かを考えてみたい。

クズヤの初見は『大乘院社寺雑記』(文明18年=1486年)といわれている。「くづ屋」と記され、茅葺き民家の意味で使用されているという(『日本民家語彙解説辞典』)。このことから、クズヤという言葉はかなり古くから使用されていたといえる。

一方、宮本常一は著書『日本人のすまい』の中で、クズヤというのは公事家がなまったものではないかといっている。宮本の考えは次のようである。

近畿地方の一部ではムギ藁で葺かれた家が一般的で、茅屋根は公事家と呼ばれる特権的な農民層の家であった。これが公事家と呼ばれ、今日に至ったものである。瀬戸内地方でも、一般農家はムギ藁で葺き、庄屋、寺院、医者、地侍などは茅屋根であった。

この説は関西地方や西日本では考えられなくもないが、クズヤは東北・関東ほか広範囲にわたるので、公事家説は成り立つとは考えにくい。

また、菅野康二は著書『茅葺きの文化と伝統』の中で、クズとは屑であるといい、次のように書いている。「くずは屑であり、その地域に普遍的にある物、すなわち屑のようにどこにでもあって、役に立たない物を利用して葺いた屋根という意味である。」

また、千葉県の聞き取り調査では「藁の良品はムシロなどの生産に廻し、屋根葺きにはクズワラを利用した。」という。

これらによると、クズヤのクズとはクズワラのことである。ワラや茅は履物や蓆などなど身近なワラ製品の材料でもあったから、屋根には不良品を使うということは考えられることである。かつては、屋根の葺き替えでも使用できる古茅をそのまま使用することがあった。

クズとは2級品、不良品という意味である。これがクズの意味を最も的確に表しているようである。

5 考察

短報であるので、論点は繰り返さないが、最後に二つの疑問点が残る。

ひとつは、なぜ葛の字が使われるのかということである。さすがに屑の字は憚られ、好字を選んだのであ

ろうか。古文書に見られる茅（萱）と葛の使い分けも、実はこのようなところにあるのかもしれない。今後、検証してみたい。

また、盛岡藩ではクズヤは柿葺きを表す言葉であったが、茅葺き屋根を表すようになったのはなぜか。クズヤという言葉がいつ頃全国に流布するようになったかは不明である。もし、盛岡藩に伝播したのが江戸時代中期以降であれば、そこで葛右衛門のクズヤと混同するようになったとも考えられる。根拠はないが、筆者はその可能性が高いと思っている。

謝辞

千葉県の聞き取りは日本民俗建築学会会員池田恵子氏による。そのほか民家に関わる方々に聞き取り調査をお願いした。ご協力に厚く御礼申し上げる。

（本稿は日本民俗建築学会平成 22 年度大会研究発表において発表したものに、新たな知見を加え、加筆修正したものである。）

註

- 1 『雑書』は正保元年（1644）から天保 11 年（1840）までの日記だが、欠落年がある。葛右衛門の登用・解任は正保以前の出来事か、または欠落年に記載されていた可能性もある。葛右衛門が盛岡城築城に関わっていたとすれば、正保以前、寛永年間（1624-1643）の登用であろう。
- 2 葺手町は現在の盛岡市中ノ橋通 1 丁目付近。葺手町の名は現在も残る。『もりおか物語』はいわゆる聞き書きである。また、『雑書』によると、大工棟梁美松門太夫が身帯高百石で侍丁に居住を許されたという記述がある（第十二巻享保 8 年 11 月 10 日）。葛右衛門は五十石取りで類族と呼ばれていることから、葺手町ではなく大工棟梁美松のように侍丁に住んだ可能性がある。

引用文献

- 阿部三夫（1990）『矢巾町の歴史』熊谷印刷出版部 pp89-90
- 大井次三郎（1967）『標準原色図鑑全集 9 植物 I』保育社 p110
- 小笠原勝郎・長岡高人（1988）『都南村の歴史』熊谷印刷出版部 p 98
- 川村迪雄（1990）『紫波町の歴史』熊谷印刷出版部

p78

菅野康二（2000）『茅葺きの文化と伝統』歴史春秋社 p19

日本民俗建築学会民家語彙収録部会（1993）『日本民家語彙解説辞典』日外アソシエーツ p248

宮本常一（2007）『日本人のすまい』農文協 p140

盛岡市教育委員会（1996）『盛岡藩雑書第十巻』（翻刻本）熊谷印刷出版部 p731,733,799

盛岡市教育委員会（1998）『盛岡藩雑書第十二巻』（翻刻本）熊谷印刷出版部 p713

盛岡の歴史を語る会（1978）『もりおか物語（八）』熊谷印刷出版部 pp75-76

横川良助 『内史略』（原本は岩手県立図書館蔵。翻刻本は岩手県立図書館（1973）『岩手史叢第二巻』岩手県文化財愛護協会 p80）

横川良助 『内史略』（原本は岩手県立図書館蔵。翻刻本は岩手県立図書館（1974）『岩手史叢第四巻』岩手県文化財愛護協会 p95）

参考文献

岩手県（1965）『岩手県史第 11 巻民俗篇』杜陵印刷

要旨

クズヤとは茅葺き民家のことである。岩手県では、その由来は屋根葺き棟梁葛右衛門であるといわれている。江戸時代の歴史家横川良助は、クズヤは本来柿葺きを指し、誤用されたものであると著書で述べている。これが一般には正しく伝えられていない。これが全国的に使用されているクズヤとさらに混同したと思われる。全国的に使用されるクズヤは、2 級品のワラや茅を意味するクズワラを使用していたことからつけられた名称であると考えられる。

なお、屋根葺き棟梁葛右衛門は実在した人物であることは明らかになったが、その登用・解任について記録した文献をまだ見出していない。別に、葛右衛門の死去と登用については『雑書第十巻』に記述があり、この葛右衛門は年代から 2 代目葛右衛門と推測した。葛右衛門が名跡となっていることも同書の記述から明らかになった。

キーワード：クズヤ、茅葺き、屋根葺き棟梁葛右衛門、内史略、雑書